

中世ドイツの教育詩人トマジン・ フォン・ツェルクレーレの『異国の 客』に映し出された悪魔像

尾 野 照 治

I.

北イタリアで1186年頃に誕生したトマジン・フォン・ツェルクレーレは¹⁾、アキレーヤのカトリック教会総大司教の宮廷に、実直な聖職者として勤めた。それと同時に教育詩人として、まず『宮廷作法の書』を当地の書き言葉、つまり北イタリアおよびプロヴァンスで使用されていた文語を用いて著した²⁾。その後1215年ないしはその翌年に、即ちまだ30才にもならない時期に10か月をかけて、騎士の倫理を説く有名な『異国の客』を書き上げた³⁾。但し、この著書を作るにあたっては、ドイツ貴族達に自分の教えを十分に浸透させるため、自分にとっての外国語であるドイツ語（中世高地ドイツ語）を取って使用した⁴⁾。

この教育詩は、対韻を施した14752行（あるいはそれよりやや少ない）から成っており、全体を通じて宮廷での節度ある振る舞い方を教えている。具体的な例による教訓に富んでおり、さながら騎士のための倫理道德の教科書と言ってよい。プロローグと十の書から構成され、それぞれの書が更に幾つかの節に分けられる。詩人は種々の原典・資料に自由に親しみ、常に自意識をもって教育に役立ちそうな事柄を書き留め、異国の素材をも自分の教養の資として蓄えていった。どのような原典・資料から、どのような過程を経て広範な教養を身につけていったのか。これについては、今で

もまだ不十分な推測の域を出ない。当時の著名な詩人達の多くは、その生没年、誕生地、作品の著作年、手本にした原拠、暮らしぶり等が不詳である。トマジンも例外ではない。それでも『異国の客』の全体構想は、先人の作品の単純な模倣ではなくて、彼自身の偉大な業績と見なされる。この作品には、彼の時代の思想体系や概念体系が影を落としてはいるが、しかし彼の目的は、そのような体系を尖鋭化したり完全なものにすることではない。無教養な人々や俗人達のために、キリスト教を背景にした体系的な教育を、理解しやすく説明することがその目的であった。作品中には、ラテン語の専門用語が中世高地ドイツ語にそのまま翻訳されて、あるいは意味をとって書き換えられて現れることが度々ある。しかしこれも、専門用語の厳密化を目ざしているのではない。むしろ人々に追体験の理解や共感を、もっと易しく可能にするためになされたことである。詩人が意識する聴衆ないしは読者は、それほど教養の程度が高くない俗人、つまり騎士や貴婦人である。更に聖職者もそれに加えられる。作品中には、下層階級の農夫や商人も顔をのぞかせるけれども、詩人が教えを垂れる相手は、上流階級の騎士や貴婦人達である。教養が高くない相手ゆえに、彼らに宮廷倫理を教えるためには、本来その倫理に属さない知識をも援用することになる。トマジンは、経験未熟な若者達や無教養の人々の役に立つ模範として、古代ギリシャ・ローマのロマンやアーサー王物語等の文芸作品の登場人物をも提示する。これらの作品の内容は本来虚構ではあるが、しかしそこには物語真実（内的真実）が描き出されているからである。

彼と同時代の偉大な詩人達は、それぞれが作品の彫琢に全身全霊を傾けた。しかし『異国の客』では、その彫琢がやや稀薄であるように見える。韻律についても、徹頭徹尾規範に合致しているとは言い難い。そのような短所があることは事実として認めざるを得ないが、しかし彼が到達している外国語（ドイツ語）のマスターぶりには、全く驚きを禁じえない。自ら

選り取った種々のテーマについて、明瞭で心に染み入るがごとき言葉で説明するものの、それでもいたずらに遠回りの説明の仕方や、くどいほどの繰り返しが無いわけではない。しかし、それほどまでして相手に理解させようとする丁寧な説明と克明な描写は、彼の文体の短所を補って余りある。この教育詩が長い間伝承されたという事実は、トマジンの教育が大きな影響力をもっていたことを如実に物語る。それと同時に、彼の表現形式が適正であったことと、聴衆（読者）に対する教養の必要性を、彼が正しく認識していたことも裏付けている⁵¹。

II.

『第一の書』では、宮廷での振る舞い方、特に食卓での節度ある作法、および人との接し方を教える。騎士と貴婦人との種々の比較の中で、控え目な態度はとりわけ貴婦人に似つかわしいこと、そして外面の美よりも内面の美の方が、貴婦人を真に飾るものであることを強調する。更に、教養のある人々は直接に、真実を語っている書物から学ぶべきだが、教養に欠ける人々は、虚構に基づく冒険物語から良きことを学んでもよいと、詩人は寛大な提言を行なう。『第二の書』では、まず第一の徳操として *stæte* (恒常性) を扱う。地水火風等の諸要素は、変化と衝突を繰り返しながらも、自らに課せられた節度を守っている。ところが人間どもは節度を守らず、神から与えられた秩序を、勝手に *unstæte* (変わり易さ) に投げ込む。人間世界で起こっている幾多の争いがその証左であると、詩人は激しく嘆く。『第三の書』では、*unstæte* を所与の秩序からの逸脱と定義する。人間の心に住まう 6 種のはかない欲求によって、つまり *richtuom* (富)、*hêrschaft* (支配)、*maht* (権力)、*name* (名望)、*adel* (門閥)、*gelust* (欲望) によって、秩序からの逸脱が起こることを、具体的に例証する。『第四の書』で

は、これらの6種の欲求に、それぞれ特有の不徳を割り振る。それらの不徳に対して、すべての徳操の原点というべきものがstæteである。だが人間がstæteを失って邪悪な罪を犯すのも、あらかじめ神の予定調和に組み込まれている。人間の運命は、このようにすべからく神が決めているのだと、詩人は確信をもって主張する。『第五の書』では、エートスの形而上的原理を発展的に述べる。善の最高のものは神であり、その他の善つまり徳操はすべて、人を神へと導いていく。悪の最も卑しいものは悪魔であり、その他の悪つまり不徳はすべて、人を悪魔へと導いていく。最高の善と最も卑しい悪の間に、上述の6種の欲求が介在する。これらは用い方によって、倫理的に善と悪のいずれかに区分される。いずれも可逆的である。悪魔達はhaken（鳶口）を用いて、人間どもを徳操の梯子から引きずり降ろそうと狙っている。カトリックの聖職者であり、教育詩人でもあるトマジンは、『第五の書』で初めて登場させる悪魔に、どのようなイメージを与えているのであろうか。神と徳操、悪魔と不徳の両陣営の対立を視野に置いて、詩人の悪魔像を詳細に検討するのは極めて有益である。この対立は、当時の人々が最も切実に望んでいた天上界が、最も嫌悪し避けようとした地獄と、対極に置かれていることに基づく。詩人が抱く悪魔像を分析することによって、何故彼が『第五の書』で悪魔をもち出さなければならなかったのか、そして悪魔を登場させることによって聴衆（読者）に何を訴えようとしたのかということも、いっそう深く理解できると思われる。そのために、アナクロニズムに陥り易い主観的解釈を避けるべく、できる限り原典に語らせる手法を採る

Ⅲ.

『第五の書』では初めに、最高善とその他の善、最も卑劣な悪とその他

の悪、そして5つめに道具を提示する。最高善は神、その他の善は諸々の徳操のことであり、最も卑劣な悪は悪魔、その他の悪は諸々の不徳のことである。更に、5つめに挙げられる道具とは、それを用いて天国に昇ることができると同時に、地獄にも墮とされることがありうるものである。その道具は6種類あって、門閥、権力、欲望、名望、富、支配のことである。これらの道具は使い方によって、良くもなるし悪くもなる。徳操に基づいて正しく使うなら、人を天国へ導いてくれる。しかし不徳に染まって間違った使い方をすると、それらは悪魔の道具に変わって、人を地獄へとひきずり落とす。この6種類の道具は、『第五の書』の中で詩人の比喩的説明に幾度も用いられる。

Ez sint zweier flahte guot / und zweier flahte übel, fwer fin tuot /
war; daz vümfte bereitfchaft ift / und geziuc des übelen zaller vrift. /
Daz êrftē heizet oberf tez guot, / wan ez niht wan rehte tuot: / daz ift
unfer herre got. / fin wille unde fin gebot / ift daz man rehte tuo, /
fwer im wil komen zuo. / von reht got alfô heizen fol, / wan ir fult
daz glouben wol / daz von dem oberiften guot / kumt fwaz man rehtes
tuot.⁶¹⁾

《もし人が注意を向けるならわかることだが、二種類の善と二種類の悪がある。5つめは道具である。これはいつも悪しきものの道具である。第1の善は最高の善である。というのは、それは正しいこと以外に何もしないからだ。これは即ちわれらが主、神のことである。神の意志と命令は、もし人が神の所へ行こうとするなら、正しく振る舞うようにということだ。当然ながら、神は最高の善と称されるべきである。というのは、人が行なう正しいことはすべて、この最高の善から生ずるということを、あなた方は信ずるべきだから。》

Daz ander heizet guot gar, / daz fint die tugende, daz ift wâr. / gar
guot ichs dâ von heizen wil, / wan von den tugenden koment vil / hin
ze dem oberiften guot: / wan fwer nâch den tugenden tuot, / wizzet
daz er komen fol / zem oberiften guote wol.⁷⁾

《他の善は全く良いものだ。これは徳操のことである。このことは真実だ。
多くの人々は徳操によって最高の善に至れるがゆえに、その徳操を私は全
く良いものだと言おう。徳操に応じた振る舞いをする人は、確かに最高の
善に至ることができるということを、あなた方は知っておきなさい。》

Daz êrſte übel der tiuvel ift, / wan von dem kumt zaller vrift / fwaz
übels in der werlde gefchiht; / dâ ift er âne teil niht. / den muge wir
heizen wol / daz niderft übel, wan er fol / durch ſinen grôzen
übermuot / und daz ez daz oberift guot / wil, weſen zaller vrift /
niderre dan dehein übel ift.⁸⁾

《第1の悪は悪魔である。というのは、この世で起こる悪はどんなものでも、
いつも悪魔から生ずるからだ。悪魔はこの世で、完全な姿では存在していな
い。私達は悪魔のことを、最も卑劣な悪と呼んで当然である。というのは、
悪魔は自分の大きな思いあがりのために、そして最高の善がそのことを望ま
れるので、いつもどんな悪よりもっと卑劣であるはずだから。》

Daz ander übel, daz ift wâr, / daz ift der untugende fchar. / die
heiz ich gar übel von reht, / wan fi machent den wec fleht / unz dâ
daz niderft übel lit: / dar bringent fi uns zaller zît.⁹⁾

《他の悪は、まことに不徳の群のことである。この群を私は、当然ながら
全く卑劣であると呼ぼう。というのは、この群は最も卑劣な悪がいる所ま
で、道をならして通りやすくするからだ。この群はいつも、私達を悪魔の

所へ連れていく。➤

Daz vümfte ift übel unde guot, / als mich bewifet mîn muot. / ich
mein diu feh's dinc, adel, maht, / geluft, name, rîchtuom, hêrſchaft. /
fi fînt gerlich guot niht, / wan ez eim übeln manne geſchiht / daz er
fi hât, daz ift wâr. / fô fînt fi ouch niht übel gar, / wan fi hât dicke
ein wol gemuot. / fô fînt fi übel unde guot: / mich dunkt, ſwaz wirrt
und hilfet wol, / übel und guot heizen ſol.¹⁰¹

≪5番目のものは、私の心が見せる通り、良くもあり悪くもある。私が言っているのは次の6種類のもの、即ち門閥、権力、欲望、名望、富、支配である。これらは完全に良いというわけのものではない。というのは、卑劣な人もそれらを身に備えるからだ。これは真実である。反対に、それらはまた完全に悪いというわけのものでもない。というのは、立派な心の人もしばしばそれらを身に備えるからだ。このように、6種類のものは悪くもあり良くもある。思うに、邪魔するものと役に立つものは、それぞれ悪しきもの、良きものと呼ばれるべきである。➤

善と悪の間に介在する6種類の道具と称される門閥、権力、欲望、名誉、富、支配は、先に「いつも悪しきものの道具である」(5708)と言われながら、後で「良くもあり悪くもある」(5743)と訂正される。詩人の思考は、常に自己の発言の矛盾を正しながら深まっていく。これらの道具は、徳操に従って用いられると、天上の神のもとに至る梯子を作る。それとは逆に、不徳に従って用いられると、悪魔の住まう地獄に至る梯子を作る。後者の場合それらは、悪魔が地獄へと引きずり降ろす道具であって、haken(鵝口)と称される。それゆえ人が最高の善に到達するためには、徳操によって梯子をかけるべきである。その梯子の一段一段が、すべて徳操から成る

ものでなければならぬ。不徳の段がそこに一つでも入り込むと、足を踏みはずして地獄へ堕ちていく。更に、最高の善まで昇って行こうとするなら，
stæten muot (5898)「うつろうことなき心」を常に持たなければならない。
これには大きな苦しみを伴うが、それを耐え忍びながら神の国に至ることが
できるなら、その苦しみはなんでもないものと言いうる。

Man wûrket in alter und in jugent / ein ftiege ûz der untugent, /
diu hât in dirre werlde ein ort / und daz ander hât si dort. / die ftaffel
fint gemachet gar / von untugenden, daz ift wâr. / ein iegelich
untugent hât / von des niderften üfels rât. / die ftaffel fint nider
gekêrt, / wan ir iegelicher gert, / fwer drûf trete, daz er valle nider /
unde kome ouch nimmer wider.¹¹⁾

《人は若いときも年をとってからも、不徳によって梯子を作る。その梯子
は、この世とあの世をつないでいる。梯子の各段は、すべて不徳によって
作られている。これは真実だ。各段は、最も卑劣な悪の入れ知恵によって、
不徳を備えている。また各段は下の方に向けられている。なぜなら、それ
ぞれの段は、その上に足をのせる人が落下し、二度ともどって来ないこと
を望んでいるからだ。》

die haken fint richtuom, maht, / adel, name, geluoft, hêrfschaft. /
wizzet daz von den fêhs dingen / mag einem tôren mißfelingen. / si
ziehent in vil lîhte dar / dâ er wirt gefchendet gar. / dâ von fint si
bereitschaft / des niderften üfels. er hât die kraft / daz er dâ mit
ziuhet einen man, / der sich niht behüeten kan, / dar er niht varn
folde, / ob er rehte varn wolde. / fwenn ein guot man varn wil / ûf
die ftiege diu von vil / tugenden gemachet ift, / die haken fint dâ

zaller vrift / und wellent in ziehen wider, / daz er zer andern ftiege
valle nider.¹²⁾

《これらの鳶口は、富・権力・門閥・名望・欲望・支配のことである。これら6つのものによって、愚か者は不幸になることがあるということを、あなた方は知っておきなさい。それらは彼を、すっかり恥辱を受ける所へと、いとも簡単に引きずり下ろすのだ。それゆえ6つのものは、悪魔の道具である。正しく（天国へ）行こうとするなら決して行くべきではない所（地獄）へと、自分を守りきれない人を鳶口で引きずり下ろす力を、悪魔は所有している。立派な人が、多くの徳操で作られている梯子を昇って行こうとする場合、そこにはいつも鳶口が待ち構えていて、その人が別の梯子（地獄への梯子）に堕ちて来るように、彼を引きもどそうとするのだ。》

fwer ze der milte und zer diumuot / ftigen wil, hêrſchaft unde guot /
ziehent in fnelle wider: / fô muoz er zer erge nider / vallen und ze
der übermuot. / fwer milt wil fîn, dem ſpricht daz guot / 'du wilt
werden gar ein wiht. / ein man iſt âne guot ze niht.' / fwer diümüete
iſt, dem ſpricht hêrſchaft / 'dune hâft deheines herren kraft. / du
möhteſt dich ſchamen hart,' / und bringet in in die hôchvart. / fwer
wirt hôchvertic durch fîn êre, / den vellet fîn êre ze fêre.¹³⁾

《もし人が、気前よさと謙虚さの方へ昇って行こうとするなら、すぐに支配と財貨が彼を引きもどす。すると彼は、吝嗇と思いあがりの方に堕ちて行かねばならない。気前よくありたいと思う人に財貨は言う：「あなたはとてもくだらない人になろうとしている。人は財貨がなければ無用の長物だ。」謙虚である人に支配は語る：「あなたは君主の力を持っていない。だからあなた自身をひどく恥ずかしめることになるだろう。」そのように言って、支配は彼を思いあがらせる。自分の名誉のために思い上がる人を、名

誉は容赦なく引きずり落とす。》

fwer wil zer dritten ftaffel komen, / daz hân ich ouch wol vernomen /
daz in adel ziuhet dan, / wan ir fult wizzen, fwelich man / gedenket
wie edel er fî, / er gewinnet einen nît dâ bî / daz einem andern man
fî baz / denn im erboten, wizzet daz. / alfô ziuht in zaller zît / adel
von liebe hin zem nît. / der kan fîch boeslîch verfinnen, / der daz
nîdet daz er folde minnen.¹⁴⁾

《梯子の三段めに昇って行こうとする人を、門閥が引きずり下ろすということも、私は確かに聞いている。というのは、自分がどれほど門地が高いかを考える人は、そのとき自分よりも他の人がもっと好遇されているという妬みをおぼえるからだ。そのことをあなた方は知っておきなさい。こうして門閥はいつも彼を、愛の心から妬みへと引きずり下ろす。本来愛すべきものに妬みをおぼえる人は、全く思慮分別を持たない人である。》

fwer zer vierden ftaffel komen ift, / den fchündet fîn maht zaller
vrîft / daz er niemen vertragen fol / und ziuht in alfô harte wol / von
der fenfte hin zem zorn, / fô hât er den ftrîft verlorn. / fwenner
vûrbaz treten wil / hin zem reht, fô fchadet im vil / fîn geluft: fwer
wil gân / nâch geluft, muoz daz reht lân. / der geluft machet harte
fleht / den wec vom reht zem unreht.¹⁵⁾

《梯子の4段めに昇って行く人を、彼の権力はいつも、誰に対しても目こぼしをしないようにとさとす。そしてものの見事に彼を、心の優しさから怒りへと引きずり下ろす。こうして彼は、この戦いに敗北してしまうのだ。彼が梯子を更に正義の方へと昇って行こうとするなら、彼の欲望がひどく損害を与える。即ち、欲望の方へ行こうとする人は、正義をあきらめなけ

ればならぬ。欲望は、正義から不正に至る道を、大いにならして通りやすくするのだ。》

fwer zer wârheit komen mac, / der hüete sich vor des ruomes flac, /
wan ift er ein genanter man / unde vrewet sich dar an, / der lât gern
liegen zaller zît, / daz man von im fage wît. / er muoz sich von der
wârheit / zer lüge feln und zem meineit, / wan im hebt unhôh ob er
liege. / alfô ziuht in von der ftiege / der tugent fin name wider, / daz
er zer andern ftiege nider / valle. des ift er vil gemeit, / der doch
niht kumt ûz dem leit: / daz niderft übel mein ich dermite.¹⁶⁾

《真実に至ることのできる人は、名声の攻撃から身を守るがよい。という
のは、彼が名声を高めている人であっても、またそのことを喜んで、彼
は自分の噂を大きく広めてくれるよう、いつも人に嘘をつかせているから
である。そういう人は真実から離れて、嘘と偽証に自分を委ねなければなら
ぬ。彼が嘘を言うなら、彼は決して重要人物だと思われてはならないから。
こうして名望は彼を、徳操の梯子から引きずり下ろす。その結果、彼は
別の梯子に堕ちて行く。自分も苦しみからのがれられないのに、その人はひ
どくこのことを喜んでいる。その人とは、最も卑しい悪（悪魔）のことだ。》

詩人は徳操と不徳を、それぞれ神と悪魔に関係させ、それゆえにまた天
国と地獄にも関係させて説明を続ける。その際、優れた徳操を持っていた
がゆえに、神の国へ昇ることができた諸々の例を、聖書に登場する著名な
人物達によって証明し、自分の教えに確かな真実性を加える。Abrahâm
(アブラハム)はgehorsam(従順さ)によって、Moyses(モーゼ)は
diumuot(謙虚)によって、îob(ヨブ)はgedultikeit(忍耐)によって、
Finêes(フィネウス)は神の命令にそむいたことを、心底から悔いたがゆ

えに, Îsâac (イサク) は kiusche (潔白) によって, Jâcob (ヤコブ) は einvalt (率直さ) によて, Ênoch (イーノック) は reinikeit (純心) によって, そして Jôseph (ヨゼフ) は悪を善で償ったがゆえに, 最高善 (神) のもとへ赴くことができたのだ。しかし彼らは皆, 今挙げた唯一つの徳操のためだけで, 神の国へ昇ることができたわけではない。他の徳操もすべて備えていたがために, 実現できたことに留意しなければならない。すべての徳操を完璧なものとして持つことができるのは, ただ神のみであるけれども, しかしいやしくも最高善たる神のもとに近づこうとする者は, 完璧ではなくともすべての徳操を合わせ持つことが求められる。神, 天国, 徳操のトライアングルは, 決して崩してはならぬものであることが, 詩人の羽根ペンによって厳粛に書き記される。

feh, die fint alle komen dar / niht durch eine tugent, daz ift wâr, /
doch erschein ein iegelicher baz / an der tugent, wizzet daz, / die ich
iu vor genant hân. / fwer aver wil ze himel gân, / der muoz die
tugende haben gar, / daz geloubet wol vür wâr: / er muoz fi hân
gemeinliche, / mag ers ouch niht hân genzliche.¹⁷⁾

《見よ, 彼らは皆ただひとつの徳操を持つがゆえに, 神のもとへ昇って来たのではない。このことは真実である。各々の者は, 私が先に挙げたそれぞれ一つの徳操の点で, 他の徳操より秀でていたということなのだ。しかし天国へ昇って行こうとする人は, 諸々の徳操をすべて持っていなければならぬ。そのことを真実として, しかと信じなさい。その人は徳操をすべて完璧なものとして持つことはできないけれども, とりあえずすべての徳操を合わせ持たなければならぬ。》

すべての徳操を備えている人とは逆に, 不徳に染まっている人は地獄に

堕ちなければならない。不徳はそのような人を、徳操豊かな人なら決して行くべきではない所へ、ひとりの例外もなく連れて行く。しかし、ただ一つの不徳あるいは罪によってのみ、地獄に堕ちるわけではない。この場合にもやはり詩人は、それに該当する人を聖書から証人として連れ出して、自分の発言が真実であることを証明する。Nemrôt（ニムロデ）や Kâyn（カイン）は、いくつもの悪事を犯し罪を重ねたがゆえに、地獄に堕とされたのだ。それなのに私達は、そのことを無視して不徳に染まり、いっこうに改心しようとしていない。激しい嘆きの言葉を書き記して後、詩人は喜捨についての忠告を行なう。神に喜捨を行なえば、裁きを手加減してもらえるのであろうか。喜捨の額が大きければ大きいほど、免罪の効果も大きくなるのであろうか。このような大それた疑問にも、詩人は明解な説明を加えていく。

Ich hân gehôrt grôz nerrifcheit, / daz ein man hât gefeit / 'ich mac
wol tuon swaz ich wil, / wan ich hân guotes alfô vil / daz ich ledege
mîne funde / mit mîme almuofen zaller ftunde.' / fwer dar ûf
fünden wil, / fîn almuofen hilfet in niht vil: / got der læt fîn geriht /
durch fînes guotes willen niht. / jâ ift gar in gotes hant / beidiu
himel unde lant: / er bedarf fîns guotes niht. / zwîu lieze er danne fîn
geriht? ¹⁸¹

≪「私は望むことを何でも、十分にすることができる。なぜなら、自分の罪を喜捨によっていつでも帳消しにできるほど、多くの財貨を所有しているのだから。」というひどく愚かな考えを聞いたことがある。免罪を当てにするあまり罪を犯してもよいと思う人の喜捨は、彼のためにならない。神は喜捨を受けたからといって、裁きをやめることはなさらないのだから。まことに天も地も、一切が神の御手の中にある。従って神は、財貨をお受

けになる必要がない。一体どうして神は、喜捨を受けるときに裁きをやめたりなさいますか。》

喜捨によって免罪を期待してはいけないが、さりとて神に喜捨することを怠ってはならぬ。免罪を期待しながら喜捨を行なうことは、神が貧しくて困っておられることを前提としていることになる。天も地も一切を手中にしておられる絶対者に対して、甚だしく愚かな行為と言える。喜捨の額については、各人の力量に応じた額でよい。清らかな心によって喜捨するのであれば、富者の喜捨も貧者のそれも、神にはいずれも同じように好ましい。富者が惜しみながら行なう多額の喜捨よりも、貧者がすすんで行なう少額の喜捨の方を、神はいっそう喜ばれる。それゆえ、おおげさに神殿を建てて神に奉納したソロモン王よりも、そこで僅かの喜捨を心から行なった貧しい女の方が、より多くの報酬を神から得たのだ。神は喜捨の額よりも、それを寄付するときの心を重視なさる。viſchære (6207) (漁師ペテロ) も keiser Juliân (6214) (皇帝ユリアヌス) も、富裕であったにもかかわらず天国へ昇って行けなかったのは、そこに理由があるのだ。keiser Conſtantîn (6223) (皇帝コンスタンチヌス) が破滅から救われたのは、財貨のためではなく徳操のためであった。従っていかなる人も、富が自分を神のもとへ連れていってくれるなどという、愚かな希望を心に抱いてはならぬ。

次に詩人が教えるのは、徳操を身につけていない支配者が、支配権をふるうことによってもたらす損害と罪についてである。不徳の支配者は、徳操を好まれる神に従おうとせず、むしろ不徳を用いて人々を神から引き離そうとする。かつて殿方らは、十分に徳操を備えていた。徳操ある人々は、今日よりも昔の方がずっと高い評価を得た。それゆえ昔の人々は、すすんで徳操を求めた。しかし今では、徳操よりも不徳の方が好遇される。人々

が皆不徳の方へと押し流されるのはそのためだ。悪魔によって地獄へとさらわれる人が、数えきれないほど増えつつある。詩人は無念の表情で、次のように報告する。

fô gedenket lîht dâ bî / ein man 'möht ich fô rîche fîn / als dirre ift,
man êrt mich ouch: / fûs hât man mich vûr einen gouch, / fwie
biderbe und fwie wîfe ich bin. / ich muoz kêren an gewin / mînen fîn
und mînen muot. / ich fihe wol daz der tuot / fwaz er wil, der guot
hât. / man hœret gerne fînen fât. / ich muoz werd'n ein bœfewiht: /
ich erwirb mit vrûmkeit niht.'¹⁹⁾

《そのとき人は次のように考えがちだ：「もし私が、この高利貸ほど裕福でいられるとするなら、私も人から敬意を表されるであろうに。ところが、私がどんなに有能で賢明であっても、貧しい私は愚か者だと見なされる。こうなると私も、自分の心と気持ちを金もうけに向けざるを得ない。財産を所有している人は、望むことをなんでもできる。その様子がしかとうかがえる。財産家の助言に、人は好んで耳を傾ける。だから私だって、金もうけにふけるくだらない人間にならざるを得ない。有能さでは何も獲得できないのだから。」》

このような時代状況ゆえ、Êrec（エーレック）、Gâwân（ガーヴァイン）、Parzivâl（パルツィヴァル）、Îwân（イーヴァイン）のような徳操高き円卓騎士らは、もはやどこにも見あたらず。騎士らにとって最高の模範となる徳操豊かな王アルトゥースが、もはやこの世にいないからである。このような時代には、有能な人は姿を現わすことができず、姿を現わせば不徳で邪悪な人々のなぶりものになる。姿を隠しているこれらの立派な人々を見つけ出すためには、徳操高き人々の名誉を声高く讃える必要がある。これ

は、そのまま聖職者にもあてはまる。今ではどの聖職者も、知識を求めて刻苦勉励することがない。知識を求めない方が、いっそう好ましい扱いをしてもらえるからである。大司教から何かを期待しようとするなら、大司教の不徳に自分を合わせなければならぬ。何も贈らなくても十分に快く暮らせる司教達に、教会そのものを贈る人がある。そのことで司教たちは甘やかされ、朝早く起床して学ぼうとする厳しい態度を忘れてしまう。知識をむさぼり求めても何も利益が得られないので、知識を捨て去る怠け者になった。これはひとえに、不徳の主君にその責任がある。その昔、知識を求めつづけたアリストテレス、パルメニデス、プラトン、ピュタゴラスのような真の学者は、今ではどこを探しても見つからぬ。修道院や教会の付属学校で学ぶ人が少なくなったのも、主君らの不徳によるところが大きい。勿論、不徳に染まっている聖職者についても、同様のことが言える。

Seht, wie der biſcholf hât behuot / fîn ê unde ouch fîn guot, / der
felbe niht gepredegen kan, / und fwâ er weiz einen man / der gerne
lernt, dem hilft er niht! / wizzet ir wâ von daz gefchiht? / er wil daz
fîne phaffen gar / fîn âne kunft als er, deift wâr. / des entuot ein
blinde niht: / wan ein man der niht gefiht, / dem ift doch lieb zaller
vrift, / ob ein gefehender bi im ift. / der biſcholf, daz er ſolde geben /
den die ze ſchuol hânt armez leben, / daz gît er den die umbe in
ftrebent mit girde nâch gewin / unde ahtet dar ûf nihtes niht / waz
dem armn ze ſchuole gefchiht.²⁰⁾

＜見よ、自ら説教する能力のない司教が、神の権能と神の慈悲に留意しなかった様子を。司教は学びたがっている人を知っている、その人を助けないのだ。どうしてそのようなことになるのか、あなた方は知っているだろうか。司教は配下の聖職者達が、自分と同じように全く学問に無知であ

ることを望む。このことは真実だ。しかし、目の見えない人はそのようなことをしない。というのは、その人はいつも、目の見える人が自分の側にいることを望むからだ。司教は、学校で貧乏学生をしている人々に与えるべきものを、自分にまわりついて貪欲に利益を求める連中に与えている。そして学校で貧しくしている人々に、どのような事態が起こっているのか、全く意に介さないのだ。➤

貧しいながら苦学をして、大きな希望を抱いて宮廷にもどって来ても、そこでは知識を蓄えた立派な人よりも、牛の方が好遇されている。知識のある人よりも、財貨を多く所有する裕福な人の方が尊敬される。それゆえ、知識や分別はいとわしいものに思われ、人々はこぞって物質的利益を求めるようになる。このような事態が生じたのは、不徳に染まっている主君らのせいであると、詩人は厳しく断ずる。そして改善のための有益な助言を行なう。主君たる者は、神の恩寵を得ようとするのなら、人々をその能力と徳操ある心に応じて遇するべきである。そうすれば人々は、知識を磨き徳操を求めるようになる。それと同時に、彼らの間に分別と誠実な心も育っていく。このように説明した後、詩人は再び最初に挙げた6つの欲求をもち出して、それらを紐の結び目に喩える。悪魔の手を避けようとする人は、6つの不徳の結び目をすべて避けなければならない。これらの結び目のいずれか一つにでも叩かれたら、悪魔の餌食とされ地獄に引きずり下ろされる。そうされないための方策を、詩人は6つの徳操の結び目に求める。

Ich hânz gefeit vor langer vrift / wie diu keten gevlohten ift, / und
wie richtuom, gluft, hêrſchaft, / maht, name, adel habent kraft / daz
fi die untugent gar / underbindent, daz ift wâr. / ſeht, daz ſint diu
underbant, / diu fol man ſchiuhn: ſwer ſtiuvels hant / vliehen wil,

der muoz gar / diu fehls dinc fchiuhen, daz ift wâr. / fi underbindent
die untugent / beidiu an alter und an jugent.²¹⁾

《私はずっと前に、次のことを話した。即ち、(不徳の主君を打ちすえる) 紐がどのように編まれているのか。そして富・欲望・支配・権力・名望・門閥が、不徳を互いにすっかり結びつけあう力を、どのようにして持っているかということを。この話は真実である。見よ、これらは紐の結び目なのだ。人はそれらを避けなければならぬ。悪魔の手を避けようとする人は、これら6つのものをすっかり避けなければならない。このことは真実だ。6つのものは老年においても若年においても、諸々の不徳を互いに結び合わせるものである。》

wær niht rîchtuom unde guot, / fô wære girde und übermuot / ân
underbant. wær niht hêrſchaft, / waz möhte dan hân folhe kraft /
daz übermuot und ſmâcheit / möht underbinden fô gereit? / nu ſage
mir, wær niht diu maht, / waz hiet danne folhe kraft / daz ez
verbunt die üppikeit / aver zuo der ſmâcheit? / wær niht name, waz
möhte denne / die tœrfcheit etewenne / verbinden zuo der üppikeit? /
waz möht geluſt und tœrfcheit / verbinden baz dan adel tuot? / niht,
mich entriege dan mîn muot.²²⁾

《富と財貨がないのであれば、欲望と思いあがりは、紐の結び目を持たないであろうに。支配がないのであれば、思いあがりと卑しさをすすんで結び合わせることでできる力を、いったい何が持てるであろうか。さあ私に言ってみなさい。権力がないのであれば、虚栄を恥辱に結びつける力を、いったい何が持つのであろうか。名望がないのであれば、いったい何が、時として愚かさを虚栄に結びつけることができようか。いったい何が欲望と愚かさを、門閥が行なうよりももっと固く結びつけることができようか。》

心が私を欺くのでなければ、そのようなものは何もないと断言できる。➤

Nu fî wir zuo der keten knûre / diu an ir ort von ir natûre / hât
unkiufche unde trâkeit, / vrâz unde trunkenheit. / diu keten die wir
mit untugent / vlehten an alter und an jugent, / diu wirt ze helle
ftælin gar, / daz geloubet wol vûr wâr. / feht, dâ mit wadelt man
wol / fwer dâ ze helle paden fol. / mich dunket, der habe einn wîfen
rât, / der fîch hie fô paden lât / daz er niht kumt an die ftat / dâ
man bereitet stiuvels bat.²³⁾

㊤さあ、話を紐の結び目に移そう。紐はその性質上、先端に不貞・怠惰・
大食・酩酊を持っている。私達が老年でも若年でも不徳によって編む紐は、
地獄ではすっかり鉄製のものになる。このことを真実として、しかと信じ
なさい。見よ、地獄で入浴すべき人は、その鉄の紐でしかと打ちすえられ
るのだ。思うに、悪魔の風呂が準備されている所に行かずに済むように、
この世で風呂に入れてもらえる人は、賢明な助言を得ている。➤

Hie fult ir ouch wizen wol / daz man der tugende keten fol / ouch
vlehten mit fehs dingen / diu uns ze got fuln bringen. / die tugende
müezen zaller zît / mit den untugenden haben ftrît, / âlfam muoz
âne miffewende / fîn widerwertic ir undergebende. / der untugent
keten ziuht uns nider, / fô mag uns unfer herre wider / mit der
tugent keten ziehen wol: / wol dem der im volgen fol!²⁴⁾

㊤徳操の紐は、神のもとに私達を連れていくべき6つのもので編みあげら
れるべきであるということも、ここであなた方はしかとご承知おき下さい。
徳操はいつも不徳と戦わなければならない。それゆえ徳操の結び目は、間
違いなく不徳の結び目と対立していなければならない。不徳の紐は、私達

を地獄へ引きずり降ろす。それに対して主は私達を、徳操の紐で見事に引きもどすことがおできになる。神に従うべき人は幸いなるかな。》

IV.

地上から天国へ昇って行くための梯子は、6種類の徳操を表わす6つの段から成っており、それぞれの段は下から順に *armuot* (貧乏), *milte* (気前よさ), *lieb* (愛), *senpht* (優しさ), *reht* (正義), *wârheit* (真実) と称される。それとは反対に、地上から地獄へ堕ちていく梯子も、6種類の不徳を表わす6つの段から成っており、それぞれの段は上から順に *übermuot* (思い上がり), *girde* (貪欲), *neit* (妬み), *zorn* (怒り), *unreht* (不正), *meineit* (偽証) と称される。天国に向かう梯子の各段は堅固に作られているが、地獄に向かう梯子の各段は、こわれかけた状態で下に傾いており、足をすべらせやすく作られている。天国の神と6段の徳操は善とされ、地獄の悪魔と6段の不徳は悪とされる。その善と悪の間に、既に述べた6つのものが介在している。*richtuom* (富), *hêrschaft* (支配), *maht* (権力), *name* (名望), *adel* (門閥), *gelust* (欲望) の6つのものは、6段の徳操とかかわれば良きものとなり。逆に6段の不徳とかかわれば悪しきものとなる。

悪魔はこれら6つのものを、自分にとって都合のよい道具として、実に巧妙に用いる。例えば、人が天国への梯子を昇る際に、2段目の *milte* (気前よさ) に足をかけたとする。そのとき財貨を分かち与えるのにためらうようなことがあれば、善悪の間に介在する6つの道具の一つ *hêrschaft* (支配) が悪の方に傾く。すると悪魔はほくそ笑みながら、その *hêrschaft* を自分の道具 *haken* (鳶口) として用い、地獄への梯子の1段目の *übermuot* (思い上がり) にまで引きずりおとす。この段は徳操の段と異なって、下に

向かって滑りやすく作られているので、次々と段を滑り落ちて地獄へ向かうことになる。あるいは、人が天国への梯子を昇る際に、3段目のlieb（愛）に足をかけたとする。そのとき、愛すべき相手に門地の高さを見てうらやましく思い、愛することをちゅうちょするようなことがあれば、善悪の間に介在する6つの道具の一つadel（門閥）が悪の方に傾く。するとここでも、悪魔がadelを鳶口として用い、地獄への梯子の3段目のneit（妬み）にまで引きずり落とす。この不徳の段も、先のübermuotと同じように下に向かってすべりやすく作られているので、地獄にまで堕ちていくことが決定的となる²⁹⁾。

ほんの一瞬の心の隙に乗じて悪魔が忍び寄り、人が思っているよりずっと簡単に地獄へとひきずり落とされる。その危険性の大きさは、6つのものが善と悪の間にあって、どちらにも傾く流動性にある。詩人がこれらを、「よくもあるし悪くもある」と述べたのは、まさしくこの点が肝要であるとの助言である。善に向かって働くときには人のためになるものであるが、ひとたび悪に向かって働くと、どれほど悔いても余りあるほどの苦しみをもたらす。ここには、ともすると不徳に傾きがちな人の心の弱さを自覚させ、常に徳操に従った生活を心がけることを教えようとする詩人の、奥深い人生智が感じ取れる。『異国の客』の教えの中で最も重要な教えを、なによりも厳しく受け止めてもらおうと、『第五の書』に悪魔をもち出した詩人の賢察と技巧には、舌を巻かざるを得ない。

注

- 1) トマジン・フォン・ツェルクレーレ Thomasin von Zerklære の代表的著作『異国の客』Der Welsche Gastからの引用は、次のテキストによる（以後 W. Gast と略す）。

Heinrich Rückert (hrsg.): *Der Welsche Gast des Thomasin von Zirclaria*,
Berlin, 1965.

- 2) 『宮廷作法の書』 buoch von der hüfscheit. W. Gast 1174f. および 1552ff.
参照.
- 3) W. Gast 2445, 11717ff., 12228, 12278ff. 参照.
- 4) W. Gast 67ff., 71, 87ff. 参照.
- 5) Burghart Wachinger (hrsg.): *Die deutsche Literatur des Mittelalters*,
Verfasserlexikon, Berlin, 1995. : Thomasin von Zerklære の項 ; Helmut de
Boor/ Richard Newald: *Geschichte der deutschen Literatur*, Bd. 2 (Die
höfische Literatur), München, 1953. S.403ff., 413ff.
- 6) W. Gast 5705 – 5718
- 7) ibid. 5719 – 5726
- 8) ibid. 5727 – 5736
- 9) ibid. 5737 – 5742
- 10) ibid. 5743 – 5754; Joachim Bumke: *Höfische Kultur*, Bd. 2, München,
1986. S.420.
- 11) W. Gast 5869 – 5880
- 12) ibid. 5929 – 5946
- 13) ibid. 5947 – 5960
- 14) ibid. 5961 – 5972
- 15) ibid. 5973 – 5984
- 16) ibid. 5985 – 5999
- 17) ibid. 6065 – 6074
- 18) ibid. 6131 – 6144
- 19) ibid. 6309 – 6320
- 20) ibid. 6541 – 6558
- 21) ibid. 6721 – 6732; Joachim Bumke, ibid. S.28.
- 22) W. Gast 6733 – 6748
- 23) W. Gast 6749 – 6762
- 24) ibid. 6785 – 6796

25) 解釈に際しては次の研究書からも恩恵を受けた。

Ernst Johann Friedrich Ruff: Der Wälsche Gast des Thomasin von
Zerklaere, Untersuchungen zu Gehalt und Bedeutung einer
mittelhochdeutschen Morallehre, Erlangen, 1982.